

一心専念

落着き

天には一日の間違なく太陽が輝いている。大地には深緑の若葉が夏の盛装に躍っている。露しげき谷間には白百合が処女のように咲きほこつて気高い香をまきちらしている。小鳥が木蔭に朗らかにさえずる。天地の有様に曇はない。整然として一糸乱れぬ大自然の前に人間が暗い顔して立っている。

「私はどこへ行つたら落ちつけるでしょうか。私は何をしたら落ちつけるでしょうか。私は何時になつたら、落ちつけるでしょうか。」

日本の国に落ちつきがない。学校にも社会にも、都合にも田舎にも、家庭にも、個人にも落ちつきがない。小さい舟は小さい波にもゆれる、幾万トンの大船は山なす波濤をも乗りきる。大きな海に出たら波も大きいように、大きな社会だけ波風が荒い。揺れるか揺れないかは、疾風の問題であるばかりでなく、船の問題である。

太陽と大地、それには何らの動揺もなければ、煩惱もない。天の使命、地の生命、これと一つになつた人間の使命は、見出されまいか。

一時一事

どんなに多忙に働く人でも一時に二つの仕事は出来ない。一時に一事しか出来ない以上、与えられた一時に自分全体を捧げてかかる。田を耕す時はそれだけでいい。読書する時は読書することに一心になる。食事する時には、食事することに全体を使う。原稿を書く時には、それだけでいい。客と対応する時はそれだけが仕事である。

三つの世界

人の精神生活を問題にする時、三つの考えが展開する。

一、酔生夢死

何も考えない生活である。いたずらに生れて、いたずらに食ひ、何も考えず、ただ利己主義のまゝに生きてゆくのみである。こうした人たちに向かつては、「人は食うために生きるのか、人は生きるために食うのか。」という問題が提出される。今までの自分の生活が食うために生きているようなものであつた。衣食住の問題より外に考えたことがない。道がどうだろうと、国家がどうだろうと、社会の問題がどんなになろうと、自分の衣食住の問題がより贅沢にいとなまれさえすればそれでよい。極端にいうならば、金より外には何も考えたことがない。正直にするのも金のため、働くのも金のため、勤勉にするのも金のため、一切が金か地位か名誉より外にはなかつた、つまり贅沢に食うより外に何も考えていなかったのだ。

あるいは自分に一定の主義もなければ方針もない。社会の潮流には勝たれない。浮草のように流れてゆく、長いものには巻かれろ、大きなものには事えよ、時の大勢には勝たれない。弱い善人がまさにそれである。自分の存在を尊くも考えねば、不思議にも思わない。おどろきもなければ、大した悩みも悲しみもない。そうした生活か

らさめる時、その頭上に、「生きるために食うのか！ 食うために生きるのか！」それが一度は問題になる。

二、自覚、精進

生きるために食うのであって、食うために生きるのではなかった。人生の目的は決して食うことではなかった。道を求め、人生の意義を考え、修養につとめ、奮闘努力して、人格を磨き、理想を明かにしてそれに向って突進するのが人生の意義である。

初めて考えはじめると、求めはじめると、華々しい理想の世界が見える。もう放縦な、我儀な生活ではない。読書する。求道する。そうして理想的な人格者になろうと努力しはじめると、芸術の世界に至るものがある。宗教を求めはじめると、聖人、偉人、大哲学者、大音楽家などが彼の前に輝かしく見えはじめると。

彼は興奮し感激する。勉強するのもこの時である。英雄崇拜もこの時である。熱と血の躍るのもこの時である。時に自分は聖賢の如く考えられ、あるいは時に小さき土くれにも等しく見える。彼は全く努力の人であり、やがて主義の人である。時には、見る人毎が愚かに見える。社会の腐敗しているのを見ると悲憤慷慨する。そうして自分の足は大地からはなれていようすにすら考える。

しかしこの時代は、味噌の味噌くさい時代であり、修養の我がものになりきららない時代であり、何かしら猶かたいものを持つていた時代である。彼は全く生きるために食うので、食うために生きるのではない。

しかしこの時代はまだ、わがものになりきつた時ではない。あるいは大煩悩に陥つて自殺するものがある。悲観して虚無的な考えにおちたり、人生を逃避したりする。あるいは自暴自棄になつて、暗い暗黒の中に、卑しい享樂に墮落したり、あるいは遂にもとの無自覚に返つてしまつたりする。

三、現実即道

「生きるために食うのか、食うために生きるのか。」それは最後までの問題である。生きるために食うといったが、果してそうであろうかの 生きるということがただ単に、肉性的な生命をつないでいるということではなくて、我らの生活全体を意味するかぎり、生きるという人の価値は、あるいは生きる道は、食うこと以外にあるように思われたのであつた。

我らの一日は、睡眠、食事、仕事、入浴、散歩、運動、読書、娯樂等を毎日同じようにくりかえす。もし食うこと、働くこと、眠ること、読書すること、それ以外にも道があるというのであれば、それは一体どこにあるのだ。我らはまずそう考えざるを得ぬ。

果して我らは生きるために食うのであろうか。食うために生きてはいないだろうか。いいえ食うことの上に道があるのではあるまいか。生活があるのではあるまいか。

桜の満開の日である。本部員は全部そろって、長寿園に花見に行った。そうして心ゆくばかり楽しく語り、食いかつ飲んだ。生きる為に食うのであるならば、花見などに意義はない。

お客様になる。出されたお膳の上には美しい料理が、色彩よく、整頓よく、味よく作ってならべられている。経済と、衛生と、栄養と、美と、味とが一膳の料理の上に盛りされている。我らは生きることのために食わないで、かへって、食うことの上に人生を味ひ、美を味ひ、道を味っているのではあるまいか。

先には、睡眠、食事、仕事、運動、休養、読書、趣味そんなものをぬぎにした人生や、道や、理想を考えた。しかしそれは決して未だ徹底せるものではない。

ここに第三の世界がある。第一の世界とよほど似ていてしかも、それとも違う第三の世界がある。

目覚めぬ人たちが在家生活をしている。比叡山に見きりをつけた親鸞聖人も妻を持ち子を持ち、いわゆる非僧非俗になつて肉食さえせられた。

私は「一時一事」の所で、田を耕す時にはそれだけでいいと言つた。読書する時は読書することに一心になると言つた。それが第二の世界である。

睡眠をする時には、眠ることが道であり、食う時には、食うこと自身に道があり、仕事する時には、仕事の全体が道の全体である。

私は食事する時にたいへん時間をかける。一口食物を口に入れたら、そのまま箸をおく。かまれるだけかむ。五十回でも百回でも固形体がなくなるまでかむ。茶漬けをしない、汁かけをしない。飯とおかずを一緒に口に入れない。そうしてかまれるだけかんで、十分に食事の味を楽しむ。唾液は最も大切な消化液だそう。口でかむ、それだけは我らの意識の世界であり、我らの世界である。消化するか、しないかは我らの手の届かない我らの世界である。真に忠実に食うことはそのまま道である。分量を多く食いすぎぬことも、作法を重んずることも道であり、更に合掌の心で頂くに至つては、そこにこそ真の道が生かされてある。

かくて我らの現実の生活相をはなれて道はあり得なかつた。

専修一行

読書するとはただ読書することではない。そのまま自分を読むのである。

田を耕すものはただ単に田を耕すのではない。そのまま自分の心の田を耕すのである。入浴すれば、入浴することがそのまま目的であり、手段であり、道であり、全体である。

遊ぶ時にはうんと遊ぶ。眠る時には一切の邪念にさまたげられずに眠れ。働く時には何もかも忘れて働く。遊ぶ時間に真に遊ばぬのも、眠る時間にうんと眠らないのも、働く時に真に働かないのも、それはそのまま、自分を軽んずるのである。

なぜならば、今日は断じて明日のためにあるのではないからである。

彼にもし百枚のはがきの宛名を書いてもらうことを命じたとする。すると彼はなるべく急ぐ、そうして出来あがりをお早くしようとする。乱雑な書きぶりであり、時には脱字もあればまちがいもある。彼は美事人物試験に落第したのである。一枚づつ

書いてゆくことが彼自身の実現であつて、出来あがり目的ではないのだ。出来あがり目的をおいて急ぐから、彼は途中で疲れたり、嫌気がさしたりする。

食事する時に、食事することの中心点が未来にあるのではない。仕事をしている時に、仕事の出来あがった結果が目的ではない。今は今で完成であり、全体である。

真に今を忠実に生きる者には、そこに慰安があり、創造され、実現されてゆくことよろこびがある。

今の今の中に慰安とよろこびを感じる者には、その外に賞讃や、慰安などの景品がつかなくても、満足がある。

釈尊でも、ソクラテスでも、日蓮でも親鸞聖人でも、決して扇風機が回転するほど生活事相が複雑であつたり、多忙であつたのでもなく、時間が長かつたのでもない。一事に彼らの全体が專注されてあつたのである。日蓮上人から南無妙法蓮華經をとりさり、親鸞聖人から南無阿弥陀仏をとり去つた時、何が残ろう。たゞ一時一行に専念された時、その一事一行は、万行を撰取し、統一する。困融無碍の大真理も、一行の中に体認せられ、發揮せられる。だから彼は雑行を廃捨し、余行を抛つて唯一の正行を専修した。唯一行が万徳を内具し、統一する。

責任

苦悩にたえかねた者は、何時も自分の生きる道は、彼方にあると思う。

二口目には実家へ逃げ去ることを考へよう嫁の心理、

何時も他人の職業を見て羨望する癖のある男の心理、

それらは逃げて行つた彼方にこそ真に生きる天地が待つと思ふ。しかし、不幸にしてそうした間違つた行方の続く限り、どこに行つても明るい天地は待つていない。逃げ腰の人は迷う、迷う者は流転する。流転しつゝ流転することを知らぬ者は幽霊である。世界中をかけめぐつていても流転しないで、我に帰つてゐる人もあれば、三十年一つ家から出ない人にも、流転の旅の幽霊がいる。

幽霊とは現実を歩む足を失い、未来の結果に対する恐れをなくした者である。

幽霊の出来るたつた一つの原因は責任感のないことである。責任を捨て、結果を目ざす、思う賞讃や景品にありついた時だけ、愉快を感じる。

人間の持つ無明の心は、時に日傭人根性となる。日傭人に責任はない。ただ給金さへもらつたらそれですむ。ワシントン北米合衆国の永遠の父である。英国の虐政から米國を救つて独立せしめたのは彼であつた。しかし彼とて決して初めから米國を一身に背負つて立つたのではない。

彼は二十歳にして軍人となつたが、少尉の時もあれば、大佐の時もあつた。ある時の戦いである。政府は一時、民軍に俸給を与えることが出来なかつた。全軍の将士はこぞつて隊を去ろうとした。

これが日傭人根性である。地位か、名誉か、はた金かが得られなければ去つてゆく者の心理、我らはかかる人の後を追わない。世間から拍手喝采される日はいかなる烏合の有象無象でもついて来る。一度試練の刃の降る日には、日傭人だけは去つてゆ

く。学問も程度がある。体力もいい加減でいい。白熱の鉄槌の下に忍力成就する責任の人を要する。

光明団の本部に日傭人はいない。もし本部に寄生して、自己の栄達や社会的地位を得んために利用せんとする者があれば、彼は遂に本部から関係を断つであろう。光明団利用を考える一切の方々にお断りする所以である。たとえ日傭人以上の金をこの人のために本部が支出したとて本部員は決して日傭人ではない。たとえ台所が多忙のために台所で働いてもらつても、決して、いわゆる下女ではない。

全軍の将士が挙げて軍隊を去らんとした時、ワシントンは言った。

「その原因の如何にかかわらず、我はこの軍隊を去ることは出来ない。全軍悉く去つても我一人は永遠に留る。」

彼は戦に敗れて困難の起る度毎に、その責任を自分に帰した。戦いの起るや彼は「我自らまず進まう。」と叫んで全軍の先頭に立った。

責任を感じない者は自分の仕事をしていないのだ。自分の仕事をしていない者に、自分の世界はない。自分の世界のない者に自分の道はない。

ワシントンは決して野心家でなかつた、だから戦いがおわると、彼は故郷ヴェルノン丘に帰つて生活する。ジョージ戦争のすんだ後は、一農夫として鋤をとり、田畑の中に立つて、功名も栄誉も忘れて恬淡たる生活を送つた。

然るに国の一角から、突如として、「自由を与えよ。然らずんば死を……。」という叫び声が、パトリック、ヘンリーによつてあげられると、熱狂せる合衆国民はついに英国にむかつて刃をとつて立った。人民は強いて彼を田園よりひき出し与ふるに将軍の印綬を持つてした。彼は今や全米の責任を一身に負つて起つた。戦乱の困苦、飢餓、彼の辛苦は実に言語に絶した。七年の戦いはついに勝つた。自由の国は建てられた。

彼がもし野心家であるならば、彼は帝王にもなることが出来た。彼はその求めさえしりぞけた。

「苦難は一身にひき受けて、功績は他人に譲る。」

文字通り、彼は一切の功徳をあげて他に譲つた。

「米国は一に諸君に負ふ。」

とは彼の有名なる言葉である。彼は正しく米国そのものである。

学校そのものが自分とならない教育者、会社そのものが自分とならない社員、一家そのものが我とならない家族、そこに責任のあろうはずがない。責任のない所に、道も光もあり得ない。

細事

偉人聖者の大いなる所を見て小さい美点を見おとすならば、真に偉人聖者の真相を知ることは出来ない。

「大事を為さんと欲せば、小なる事を怠らず勤むべし。小積りて大となればなり。凡そ小人の常として、大なる事を欲して小なる事を怠り、出来難きことを憂いて出

来易きことを勤めず。それ故終に大なることをなす能はず。それ大は小の積んで大となることを知らぬ故なり。」(二宮尊徳)
ワシントンには偉人である。偉人である彼を知って、測量練習の時あまりに精細なる筆記をして友より笑われたことを知らない。

「虚言をはくな」それはあまりに小さい。しかしその小事が時に一国の大臣の進退に關するような問題となる。「獅子、兎を捉ふる、猶、象を捉ふる如くす。これ象を捉ふる、猶、兎を捉ふる如くなる所以なり。」である。

小さい事でいい。それに自分を捨ててきるならば、そこに大きな世界に通ずる何ものかがある。

一步をふみ出さねば百里の道も行き得ない。一滴の水も集まれば大海となる。

大事は一生に度々あるものではない。小事を捨てて、大事の至るを待つは愚の極である。十銭を空費する女に大金の支配はまかされない。

聖者という聖者、偉人という偉人に、いかなる細事でもゆるがせにしない一面がある。まして凡人である我らの生きる道は日々の細事の中におのれを捨てないで、どこに修養があり道があろう。

慈愛

やれ打つな蠅は手をする足をする

痩せ蛙まけるな一茶こゝにあり

ともかくもあなたまかせの年の暮

行水のすて所なし虫の声

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

明治天皇御製

つみあれば我をとがめよ天つ神、民は我が身の生みし子なれば

そのいづれにも深い人生がうちこまれてある。

深いとは何をいう。それは愛の深さであり、涙の深さである。

「そこに慈悲があつたか。」それだけが問題の初めであり終りである。

慈悲は一切の言説を超越する。涙は一切を生かす源泉である。

人生の深さとは、畢竟、慈悲であり、愛である。

義務の觀念には涙はない。朝顔の一鉢ですら、義務の心では生かされない。

一本の朝顔にそそぐ、加賀の千代の涙、蛙の上になげられる一茶の愛、国民の上に注がせられる大帝の大慈悲、人格とは慈愛である。

芸術を愛さない芸術家があるうか。小どもを愛せない教育家があるうか。機械を愛せよ。作物を愛せよ。書物を愛せよ。ペンを愛せよ。

慈愛の涙の注がれる所、そこだけが汝の落ちつける世界である。

慈愛を持つて汝の周囲を見かえせよ。汝の落ちつける世界がそこにある。

「何時になつたら……」それは汝の心の根が培かはれて、慈愛の心の湧く日であり、涙の泉の流れ出づる日である。

愛というも、慈悲というも、その根底をたたけば、そは一片の赤誠である。

一事を貫行せよ。誠をもつて一生を貫け！ ああ、私はついに私の心に赤誠のなくて、あまりに虚偽の充つるを悲しむ。